

のんびりゆったり  
安曇野ぶらぶら  
ガイドウォーク

# 安曇野

あづみの

# あるくし路

**NO.1**  
千国街道の宿場・保高宿を訪ねる  
～塩の道の宿場町と穂高神社と～

「塩の道」とも称される松本と糸魚川を結ぶ千国街道。その松本宿から数えて3番目の宿場がここ、保高(穂高)宿です。かつては日本海から塩をはじめとする海産物を、内陸からは麻や木綿、木炭などを運び街道の宿として発展。中世、「敵に塩を送る」という言葉の由来となった越後の上杉謙信から甲斐の武田信玄へ日本海の塩が送られた故事は、まさにこの千国街道を通じて塩が送られたことによると伝えられています。

近代、とくに明治後期以降の穂高は特産品により活況を呈し、養蚕やワサビ栽培の発展とそれを売買する商人たちにより、現在旧道と呼ばれているメインストリートのほか、明科方面へ抜ける狐小路などは料亭や置屋が軒を連ね、松本市からもわざわざ人が訪れるほどの賑わいをみせていました。

※平成26年度・長野県地域元気づくり支援金を受けて作成されました。  
※この地図は「安曇野あるくし路」の資料として作成されました。  
散策の際は歩きやすい服装を心がけ、車などの往来に十分注意し、各自で責任を持って行動してください。  
また住宅敷地内などプライベートな空間への立ち入りは、慎んでください。

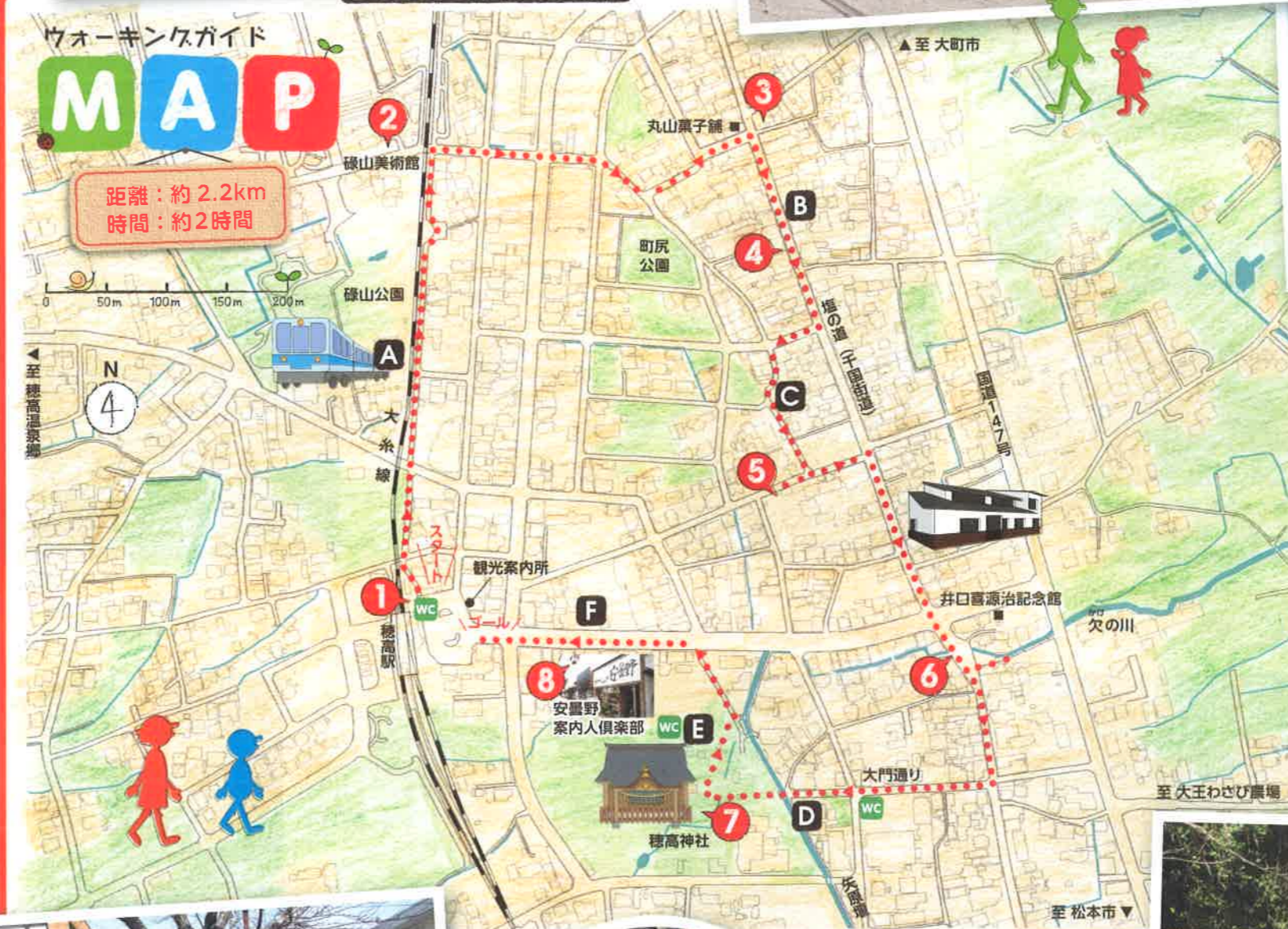
編集・発行 **安曇野案内人倶楽部**  
〒399-8303 長野県安曇野市穂高5971-1(クラフトショップ安曇野内)  
TEL: 0263-88-5563 FAX: 0263-88-5565  
URL: <http://azumino-guide.com> E-mail: [info@azumino-guide.com](mailto:info@azumino-guide.com)



A 安曇野を縦断する大糸線



B 旧街道沿いのまちなみ



C 裏路地の懐かしい風景



F 駅前通りにある石造文化財群  
左端の道祖神文字碑は明和8年(1771)建立



E 穂高神社若宮社の狛犬  
明和6年(1769)建立



D 矢原堰



## 1 穂高駅と銀座の柳



大正4年(1915)、「信濃鉄道株式会社」の民間鉄道路線として松本-信濃大町駅間で開業し、のち昭和12年(1937)に国鉄に移管され現在に至っています。駅舎は穂高神社の最寄り駅であることから社殿を模した木造建築となっていて、市民だけでなく観光で駅に降り立った人にも大変好評です。



また駅前広場にある柳の木は、関東大震災復興記念として昭和7年(1932)に安曇野産の柳が東京へ出荷された後、昭和62年(1987)にも当時の穂高町より100本が再出荷され、その返礼として最初の出荷分の2世の柳が里帰りして植樹されたものです。

## 2 ろくざん 碌山美術館

※観覧料：大人700円、高校生300円、小中学生150円



昭和33年(1958)開館。「東洋のロダン」とも称される彫刻家・荻原碌山の

個人美術館。併設されている展示棟では碌山に縁のある高村光太郎など他作家の作品も展示されています。藁の絡まるレンガ造りの、西欧キリスト教会を思わせる本館=碌山館は多くの人々の奉仕と浄財によって建設され、隣接する穂高中学校(現、穂高東中学校)の生徒も工事のレンガ運びなどを手伝ったそうです。建物はその特徴的な外観からテレビドラマなどでは「教会」としてロケ撮影が行われたこともありました。(碌山館：国登録有形文化財) ※「安曇野あるく路」のガイドツアーでは入館しません。

## 3 ますがた 北の枅形



中世に誕生した保高宿は外敵の侵入を防ぐ目的から宿場の入口が枅形(鍵の手)のように屈折していました。街道北側入口の枅形には明治42年(1909)創業の老舗和菓子屋の丸山菓子舗があり、角に立つ松の木や付近に鎮座する道祖神などが往時の様子を偲ばせています。

## 4 旧若松屋



現在雑貨店が営業している建物は、明治初期の自由民権運動家・松沢求策の生家です。土蔵造りを発展させた見世蔵建築は一般の民家建築に比べて防火性能に優れており、窓の扉の召し合わせ(重なる部分)が段形で密閉性を高める構造となっているところにもその一端を見ることができます。

## 5 火の見やぐら



踊り場に小屋を付属する珍しいデザインの大型の火の見やぐらは、もとは昭和30年代に黒部ダム建設工事施設の骨材碎石場において監視塔として使われていたものを、ダム完成後の昭和42年(1967)に穂高町が譲り受け、火の見やぐらとして再生活用したものです。昭和の一大国家的プロジェクトであった黒部ダムの建設当時の遺構が場所を変え、いま穂高のまちなかで静かに佇んでいます。

## 6 ますがた 南の枅形



街道南側入口となる枅形は、現在の駅前通りと旧街道との交差点南のあたりにあり、ちょうど矢原堰が横断していた為に木橋がかかれていたそうです。また保高宿には番所があったことも知られており、場所は定かではありませんがこの南の枅形にあったであろうと推測されています。

枅形の傍らには民衆信仰の十王堂や大型の青面金剛像・二十三夜塔があります。(十王堂は個人所有の為、内部非公開)

## 7 穂高神社



日本アルプス総鎮守の神様として名高い同社は、本宮(里宮)はここ安曇野市穂高、奥宮は上高地の明神池畔、嶺宮は奥穂高岳の山頂に、それぞれ鎮まっています。御祭神の穂高見神と綿津見神は海人族である安曇族の祖神とされる海神で、この地に定着した安曇族と穂高神社の密接な関係を示しています。正確な創建年は不明ですが、平安時代延喜式神名帳に「名神大社」として記載があり、古代からの全国的な大社であることが分かります。



- 本殿 20年に1度の大遷宮で本殿の新たな造営が執り行われ、その間に2度の小遷宮が行われます。新たに造営されるのは常に中殿(穂高見神)となり、また本殿の榿木は他に例を見ない特徴のある形式となっていて、穂高造と呼称されています。
- 御祭神 中殿：穂高見神(ほたかみのかみ) 左殿：綿津見神(わたつみのかみ) 右殿：瓊瓊杵神(ににぎのかみ) 別宮：天照大御神(あまてらすおおみかみ)



●お船祭り ※長野県無形民俗文化財 毎年9月26~27日に行われる例大祭の御船神事(通称「お船祭り」)は、大きな舟形の山車をぶつけあう勇壮なお祭りです。(お舟の引廻しは27日のみ。) 9月27日は安曇族の祖である安曇比羅夫(あずみひらふ)が天智2年(663)の白村江(はくすきのえ)の戦いで戦死した日と伝えられ、山車が舟形なのは海人族としての記憶が現代に生きている証しと語られています。祭りの様子は神社資料館「御船会館」にて詳しく紹介されています。

●大鳥居 大きな両部鳥居。建立年不明ですが、明治22年(1889)の大遷宮祭に発生した境内の大火事で受けた焼け跡が南側の柱上部に残っており、少なくともそれ以前の建立であることが推察できます。

## 8 クラフトショップ 安曇野 (安曇野案内人倶楽部)



駅前通り沿いにあるお店は安曇野を中心とする工芸作家の作品が並び、木工・ガラス・皮・織物など多彩でユニークな作品を販売しています。隣接するコーナーには安曇野案内人倶楽部の運営するカフェコーナーがあり、観光資料も充実。まちなか散策の小休止スポットとして、また列車やバス出発までの時間待ちなどにたいへん好評です。

